

令和5年度 静岡学園中学校・高等学校 自己評価

本校の教育理念	1. 自主自立の精神 … 自分で考え、判断・決断し、混沌とした社会で自立して生き抜くための「自主、自立の精神の尊重」 2. 共生の精神 … 地球上の全人類が地球規模の課題を協力して解決し、すべての生命がともに生きていくことを願う「共生の精神」の尊重 3. 真理と生命を尊ぶ精神 … 生命の尊厳に対する畏怖の心と人間としての誇りを持ち、私利私欲なく真理を追究し、真摯に社会に貢献しようとする「真理と生命を尊ぶ精神」の尊重 4. 進取の精神 … 新しい時代を見据え、どんな課題が起きても果敢に解決し、進歩させようとする「進取の精神」の尊重
本校の教育目標	1. 真のエリートの育成 … 知性・品性・高い倫理観、崇高な使命感を持った真のエリートを育成する 2. 地域社会に貢献できる人材の育成 … 郷土愛と地域愛を育て、様々な形で地域社会に貢献できる人材を育成する 3. 国際社会に貢献できる真のリーダーの育成 … 多様な価値観、幅広い教養とコミュニケーション能力を身につけ、日本文化を理解し、国際社会に貢献できる真のリーダーを育成する
教育の特色	これからの未来社会が抱える複雑で解決困難な課題を克服できる人材を育成するために、高校には全国初となる「教養科学科」を設置。従来の普通科以上に幅広く、深い知識とともに、領域横断的な視野を身につけ、「自ら考え、論理的に思考・分析し、知識を統合する力を養う。教養科学科として、本校独自の特徴的な専門科目を履修・修得していく。また、外部講師及び本校教員による「シズガク・ゴールデン・タイム（SGT）」は正規の授業ではないが、生徒にとって貴重な学びの機会となっている。その他にも、国際交流をはじめとした多彩な学びのプログラムが用意されている。

達成度 A ほぼ達成(8割以上) B 概ね達成(6割以上)
C 変化の兆し(4割以上) D 不十分(4割未満)

学年 教科 分掌	担当	No.	令和5年度重点目標	具体的施策及び計画	達成状況（重点目標を達成するために行った具体的事項	達成度 A・B・C・D
学 年	中学部	1	生徒・保護者に信頼される安全・安心な学びの場を提供する。	ア)日々の声がけや孝友日誌などを通して生徒の変化の早期発見に努めるとともに、統一されたルールと学年目標に基づいた行動や規律正しい生活を心がけるよう、暖かい指導を行う。 イ)生徒指導上の課題や情報は中学部及び生徒指導課で共有し、全体で対応する。BLENDを活用して保護者との連絡を丁寧かつこまめに行い、不安を募らせないように努める。 ウ)学校評価における「総合的な学校への満足」の肯定回答が生徒・保護者とも90%以上を目標値とし、互いに刺激を与え合う機会や進路実現に向けたサポートの充実を図る。	ア)孝友日誌やクラスノートを通して生徒とのコミュニケーションを図り、生徒の変化や成長を観察した。規律正しい生活を心がけることの大切さを、日々のHRなどで生徒に語るよう努めた。 イ)中学部会や教育相談・学年部・保健室連絡会において問題生徒の情報を共有し、全体で一貫性のある対応を心がけた。保護者との連絡を密にとって理解と協力を得られるよう努めた。 ウ)学校行事の充実を図り、その様子をBLENDで保護者に積極的に配信した。学校評価における「総合的な学校への満足」の首肯回答は生徒92%、保護者91%だった。	A
		2	主体的に学習する姿勢と習慣を身に付け、学力を向上させる。	ア)全ての生徒の力を伸ばす効果的なカリキュラムの作成に努める。きめ細かい教材研究と指導計画に基づき、生徒が主体的に取り組む授業の展開を心がける。 イ)総合的な学習の時間の活動を通して、日本や郷土の歴史・文化の理解を深める。また、朝日中高生新聞と「教養科学の樹」を利用したNIE学習やキャリア教育の充実を図る。 ウ)朝学習や補講等を通して、目標に向けた計画的な学習を促す。中3修了までに英検準2級取得率を60%、2級取得を10名以上、外部模試では各教科の平均偏差値50以上を目指す。	ア)朝テストの結果を踏まえた補習や再テストを実施して取りこぼしを防ぎ、定期テスト前には学習計画表の記入や勉強会の参加を促して主体的に学習に取り組ませよう努めた。 イ)総合的な学習の時間では、各学年で計画した内容を実行し、充実した成果を得ることができた。特に、シヅクリにおいて社会人と関わることで多くを学ぶことができた。 ウ)第2回ベネッセ学力推移調査の3教科平均偏差値は1年51、2年46、3年49だった。また、今年度第2回までの中学3年生の英検取得実績は、2級1名、準2級16名だった。	B
		3	様々な体験や充実した学校生活を通して、静学のリーダーにふさわしい人間性の陶冶と成長を促す。	ア)孝友三心をはじめとする教育理念について語り、静岡学園の生徒としての誇りを抱かせる。生徒一人ひとりがクラスの一員として自覚し、自らが学級力向上に努めるように指導する。 イ)基本的な生活習慣を身に付けることの大切さに気付かせ、互いを認め合う友人関係を築き、感謝や敬意を持って友人に接する態度を養う。教員は大きな声で生徒と挨拶を交わす。 ウ)SGTや学校行事に参加する動機付けを丁寧に行う。自由参加型SGTへの参加を促し、全ての生徒が年2回以上参加することを目指す。	ア)建学の精神などについて生徒に語る機会を十分に作れなかった。クラス担任は学級運営に励んだが、年度当初に計画した学級力向上プログラムは実施できなかった。 イ)静学SELでは自分の気持ちや行動をコントロールする方法を、授業やシヅクリのグループ活動では周囲と協力することや互いを思いやることの大切さを学ばせることができた。 ウ)学校行事の事前学習や振り返りを行い、動機付けと成長確認の機会とした。自由参加のSGTの参加生徒は延べ419名、実質参加者は75名で、3年生の参加が少なかった。	B
	高校1年	4	高校3年間の基礎となる生活指導や服装指導などの初期指導を丁寧に行う。	ア)始業時に全員の生徒が席に着席している状態を取れるよう、指導を徹底させる。 イ)制服を正しく着るように指導する。特に、ボタンを正しく留めているか授業の最初に確認作業を行う。 ウ)愛校心を醸成すべく、学年集会やLHRを活用し、静岡学園の校是や歴史について理解させる活動を実施する。	ア)始業時に全員の生徒が席に着席している状態を取れるよう、指導を徹底させた。 イ)学年集会の場面で遅刻や服装など、全体に対して生活指導を行った。 ウ)愛校心を醸成すべく、9月16日(土)のLHR内にて静岡学園の校是や歴史について学ぶ活動を実施した。	B
		5	後悔のない文理選択ができるよう、計画的に指導を行う。	ア)適職・適学リサーチやキャリアガイダンスなど、文理選択の助けとなるイベントを実施する。 イ)文理・コース選択の希望調査を計3回実施し、11月には次年度の希望を確定させる。 ウ)緑風塾(総合的な探究の時間)の班を興味のある学問領域が一致する生徒同士で編成し、1年間の調べ学習を通して自身の興味や適性を判断する機会とする。	ア)文理選択の助けとなるイベントとして、適職・適学リサーチ、キャリアガイダンス、コース選択ガイダンス、R-Capを実施した。 イ)文理・コース選択の希望調査を計3回実施し、11月には次年度の希望を確定させた。第1回・2回調査はBLENDのアンケート機能を活用し、第3回は紙媒体で提出させた。 ウ)6月24日(土)、7月1日(土)、10月21日(土)のLHR内にて、大学研究、学部研究、学部ごとの入試科目の確認方法などについて学年全体に指導する機会を設けた。	A
		6	上位層を伸ばし、中下位層を引き上げる進路指導を行う。	ア)GW前や長期休暇前に進路集会を実施し、意識付けや進路情報を与える機会とする。 イ)意識の高い生徒に向けてZ会の団体受講サービスを企画・運営する。 ウ)進研学力模試に向け、国数英の3教科で過去問題の配付や対策講座を実施する。	ア)学年として計4回進路集会を実施し、模試前に意識付けをする、長期休暇中の学習についての指導をする、進路情報を与えるなどの機会とした。 イ)Z会の団体受講サービスを企画した。前後期に分けて希望者を募ったところ、延べ47名が受講した。受講者には月に一度配付式を実施し、お互いの意識を高める機会とした。 ウ)進研学力模試に向け、7月、11月、1月に国数英の3教科で過去問題を配付し、対策講座を実施した。	B
	高校2年	7	進路実現のための土台として、生徒の基礎学力を定着させるとともに志を高く持たせる。	ア)「総合的な探究」と進路指導を関連させることにより、学習に対する内発的な動機を高める。また、進路指導ガイダンス等を実施することにより、適切な目標設定をさせる。 イ)朝テストや日々の授業の取り組みを充実させ、放課後の補習を充実させることにより、基礎学力を向上させる。 ウ)進研模試において、国公立合格ラインである偏差値54(3教科)以上120名を維持する。	ア)「総合的な探究の時間」におけるSDGsに基づく社会貢献をテーマにした探究活動を、生徒自身の進路と関連付け、志望理由としてまとめた。大学での学びについて知ることにより、受験へのモチベーションの維持と、高校卒業後も学び続ける力の土台を作ることができた。 イ)朝テストを活用して基礎学力を向上させることができた。スタディサポートでは、基礎学力が維持されており、学習習慣とのバランスも保たれている。 ウ)11月の進研模試においては、国数英の偏差値54以上が100名であり、目標である120名には届かなかった。国英地歴は62名、英数理は46名、計108名以上が偏差54以上のラインを超えている。偏差値50付近の生徒の引き上げが必要。	A
		8	修学旅行など学校行事、部活動や学校外の活動に積極的に参加させることで、人間としての幅を広げる	ア)修学旅行の準備と振り返りを行うことにより、生徒の異文化への関心を高め自国の文化への理解を深めさせる。 イ)部活動や校外での活動への積極的な参加をよびかけ、心身の成長を促す。 ウ)校内で開催される出張講座や説明会、オープンキャンパスへの積極的な参加を促すことで、生徒の進路選択の幅を広げる。	ア)修学旅行の準備、実施、振り返りを通して、生徒の異文化への理解、関心を高めるとともに、自国の文化を見つめなおす機会とすることができた。また、集団行動を通じて規律を守ること、他者を尊重することの大切さを理解させることができた。 イ)部活動や生徒会活動において、生徒は中心的な役割を果たした。次世代リーダー塾への参加もあり、朝礼の時間を使ってその成果を学年で共有することができた。 ウ)夏季休暇中にオープンキャンパスへの参加を呼びかけ、多くの生徒が参加した。校内で開催された説明会やSGTIにも生徒が積極的に参加をした。	A
		9	学業や諸活動に集中して取り組むことができる環境をつくる。	ア)落ち着いた学習環境確保のために、教室の整備をおこなう。 イ)静学SELの取り組みを生徒指導に反映させることにより、こころの不調による転退学者を10名以内にとどめる。 ウ)生徒にルール・マナーを守らせるとともに、学年集会や朝礼の機会を利用してルール・マナーに関する生徒の理解を促す。	ア)各クラスにおいて教室整備を呼びかけたが、一部整備が行き届かない教室もある。ゼミ室の使用状況にも問題があり、公共スペースとしての教室使用について生徒に意識づけをしていく必要がある。 イ)メンタル不調による転、退学を10名以内にとどめることができたが、学業や部活動、人間関係の悩みを抱えている生徒が多い。各担任はきめ細かく指導・対応しているが、保護者の理解を得ることが難しいケースも多い。 ウ)修学旅行や学年集会、朝礼の機会を用いてルール、マナーについて考える機会を設け、生徒自らル考え、理解させることを目標とした。一部ルールを守ることができない生徒は存在するが、多くの生徒は基本的な生活マナーを身につけることができた。	B

高校3年	10	探究系を中心に、堅実で能動的な学びを追求させ、国公立100名以上、難関私大150名以上を目指す。また、一般系を中心に、努力の結果としての進路実現を追求させる。	ア)授業において基礎基本の徹底をはかりつつ、BLENDや孝友日誌、面談などを活用し、生徒が目標を持って自主的、主体的に学習に取り組む雰囲気を作り出す。 イ)外部模試において、偏差値54以上の生徒150名以上(約400人中)を維持できる指導を重ねつつ、偏差値50前後の層の底上げをはかり、偏差値45未満の生徒について、学習習慣の改善を図りつつ、進路意識を持たせ、意欲を引き出す。 ウ)朝学習や週末課題などを計画的に実施しながら、週単位のスケジュール観を持たせ、主体的な学習に取り組むよう促す。また、フォローが必要な生徒に対しては、早期に面談などを重ね、ボトムアップをはかる。	ア)授業の充実をベースに、精力的に個別面談を行い、学業や進路についてのアドバイスを重ねてきた。結果として、秋の総合選抜や学校推薦、また共通テストに前後した出願もスムーズに行われた。 イ)各教科による日常的な補講、特別授業の午後の補講、1月共通テスト後の対策講座などを開講。また、模試の振り返り指導や、個別指導を随時行ってきた。 ウ)課題の提示にとどまらず、スケジュール観の確認で自主的、精力的な取り組みを促すことができた。放課後の教室で下校時刻の19時ぎりぎりまで自習に励む生徒が、2月に入っても多数見られた。	A
	11	部活動、SGT、ボランティア活動など、様々な活動を継続、集大成としての結果を求めるとともに、活動の中で、自分自身の人間的な力、総合力を伸ばすことを目指す。	ア)面談や声掛けを通して、個々の取り組みと、学業との真の両立を意識させ、それぞれの成果を求めて責任ある取り組みを促す。 イ)模試までの日数(週数)を意識させながら、補講系SGTや課題などを各科目で計画的に行い、短期目標の実現を重ね、最終的に長期目標の達成に繋げる。 ウ)BLENDを活用し、個々の生徒の様々な取り組みについて記録を重ね、進路指導に活用していく。	ア)部活動等の取り組みの延長線上にある総合選抜での受験については、客観的で冷静な見方ができるよう促しつつ、ビジョンを持たせ、また個々の学業への取り組みを粘り強く指導してきた。 イ)学年部会(会議)のたびに主な行事や模試までの残り日数を共有。各教科でも、補講系SGTの実施など精力的な取り組みを行ってきた。 ウ)(BLENDにはClassiのような記録機能はが無いため)クラスごと、学習記録シートなどを用意したりGoogle classroomの課題配信機能を活用したりといった取り組みを重ねて来た	A
	12	生徒が安心して生活できる環境を整え、規律ある生活の中、学校生活を一層充実させ、下級生に対して範を示すことを目指す。	ア)感染症対策を適切に維持しながら、メリハリのある、安心・安全な学校生活を目指す。 イ)折に触れ、孝友三心に触れながら、また生活上のルールを確認・共有しながら、より良いあり方や倫理観を意識させ、学校生活や社会生活におけるルールを遵守できるよう指導を重ねる。 ウ)適切な目配りを欠かさず、必要に応じて積極的に声掛けや面談を実施しながら、教員間で情報共有を重ねる。また、個々の進路実現に向け、責任ある態度で真摯に取り組むよう促していく。	ア)新型コロナが5類移行した後についても、換気や手洗いなど声掛けを継続し、またインフルエンザも含め感染症の流行時期にはマスク着用を呼びかけるなど注意喚起を続けて来た。 イ)孝友三心、校則、交通ルールなど、折々に確認し、徹底をはかってきた。 ウ)個別面談を通し、個々の心配ことを把握し、アドバイスや励ましなどを重ねてきた。	A
国語	13	自らの目標に向かって主体的に学習に取り組む生徒の育成	ア)各学年で単元ごとに取り組む課題を設定し、個々の生徒のレベルに合わせた指導を行う。 イ)朝テストや週末課題の実施など、家庭学習の充実を促すための指導を1年次から計画的に行う。 ウ)定期テストの振り返りや小テストを積み重ねることで、自らの課題の把握と学習を促す。	ア)国語科独自の授業課題を設定し添削指導を行うことによって、個々の生徒に対する指導を行うことが出来た。 イ)週末課題に運動する形で朝テストを実施することによって、生徒自身の努力が結果に結びつくことを意識させながら指導することが出来た。 ウ)定期テストや模試の復習、授業の小テストを年間にわたって行い、生徒自身が自ら弱点を見つけて克服できるよう指導した。	A
	14	共通テストや新指導要領に対応した、効果的な指導方法の開発と授業改善	ア)活発な言語活動を通して、生徒自らが課題を見付け、主体的に解決する資質や能力を育てる授業を実践する。 イ)校内外の研修や研究会に積極的に参加し、共通テストや新指導要領に関する情報収集に努める。 ウ)週一回の教科部会の時間を活用し、教材研究の充実を図る。	ア)授業内活動やグループワークなどで主体性を育むよう努めたが、全ての単元で行うことは難しかった。 イ)校内での研究授業及び校外での研修に複数の国語科教員が参加し、情報収集に努めた。 ウ)教科部会の時間に各学年で教材研究や試験問題の検討を行い、より充実した指導に繋がるよう努めた。	B
	15	大学入試に対応できる学力の育成	ア)朝テストや小テストを繰り返し行っていくことによって、基礎的な学力を身につける。 イ)週一回の教科部会の時間を活用し、授業実践や研修の成果を共有する。 ウ)共通試験の平均得点が、探究系140点、その他の系110点以上になることを目指す。	ア)朝テストや小テストを計画的に実施し、同じ内容を定期試験に盛り込むことによって、基礎学力の定着を図った。 イ)教科部会の時間に研修の報告を受け、皆で進むべき方向性を共有し研鑽を積んだ。 ウ)共通試験の平均得点が探究系は139点、その他の系は103点であり、健闘した。	A
(地歴・社会・公民)	16	生徒の学ぶ意欲、主体的に学習に取り組む姿勢の育成	ア)因果関係を重視するとともに、資料の読み取りを通じて、生徒の「思考力」を育成する。 イ)各科目の授業において、プレゼンテーションやレポート作成など、生徒の主体的学習の機会を設定する。 ウ)各教員の授業の魅力を高めるため、各教員が積極的に研修(校内・オンラインを含む)に参加する。	ア)各自が授業の中で実践することができた。定期試験や共通テストにおいて、生徒が思考問題にも前向きに取り組めた。 イ)高1グローバルストーリーでの活動を含め、各授業においてプレゼンテーションや探究的な学びを行うことできた。ChromeBookを活用して調査やレポート作成を行うことができた。 ウ)指導力育成研修や各種研究会に参加し、それぞれに教科についての知見を深めるとともに、教員の授業指導力を高めることができた。	A
	17	新入試や新指導要領に対応した授業の改善	ア)新教育課程の授業内容を各科目において詳細に検討し、シラバスの作成を行う。 イ)科目間の接続を意識して教材研究を行うとともに、現代社会に見られる諸課題の解決に向けて考えさせる授業を展開する。 ウ)新しい授業実践や考査の改善を通じて、生徒の資質・能力を適切に評価する。	ア)広く情報を収集し、入試や生徒の状況に応じて柔軟に検討・対応することができた。 イ)SDGsを含めて現代社会の諸課題を意識するような授業実践を行うことができた。 ウ)それぞれの授業においてプレゼンテーションやレポートを取り入れ、偏りのない評価を行うことができた。	A
	18	大学入試に対応できる学力の育成	ア)朝テストや補講系SGTを積極的に活用する。 イ)生徒のレベル別指導や個別指導を行い、生徒の学力に応じたきめ細かい指導を行う。 ウ)大学入学共通テストにおいて、探究系は平均65点、探究系以外は平均55点を目標とする。	ア)補講や朝テストによって、知識・理解の定着、および受験への対応を行うことができた。 イ)個別指導の充実に加え、レベル別・志望校種別の補講を実施することで、生徒のニーズにきめ細かく対応することができた。 ウ)探究系の目標は概ね上回ったが、探究系以外との得点差が広がった。	A
数学	19	自ら学ぶ意識を持ち、主体的に学習に取り組む生徒を育成する。(指導)	ア)高校においては「授業」「週末課題」「朝テスト」、中学においてはそれに対応する教育内容の「運動」を意識し、実践する。 イ)個々の生徒のレベルに応じたきめ細かい指導を実践するため、教材のより良い活用を検討し、各学年で協力して指導にあたる。 ウ)生徒に数学の面白さを認識させ、生徒の探究心を高める内容豊富な授業を実践するため、教材や授業展開などの工夫を実践する。とくに高校1年生は1人1台端末を持つので、効果的に活用していく。	ア)中・高ともに「運動」を意識した教育ができている。 イ)個々の先生方が授業集団の様子に応じて内容を選別することができた。同一評価集団においては横並びの先生方が情報を共有することができた。 ウ)様々な場面で先生方が情報を共有している。高校1年生ではChromebook端末を使って朝テストや授業プリントの解答の配信などを行っているが、今後もより良い方法を検討していく必要がある。	A
	20	多様化する入試に対応できるような指導方法を研究する。(教材研究)	ア)基礎基本の確立を意識した作問を心掛ける。とくに高校1、2年生においては「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」を意識した作問を確実に行う。 イ)昨年度までの入試をより深く分析し、本校生徒の課題を意識しながら指導にあたる。 ウ)新学習指導要領で導入されている統計分野の指導方法の研究を進める。	ア)各々先生方が創意工夫して作問することができた。また、三観点評価に応じて問題を適宜作成することができた。 イ)昨年度の入試の傾向をみて、朝テストや授業の中で、意識して指導することができた。 ウ)実際に統計の指導が始まり、担当の先生方が工夫をこらしながら授業を行った。	A
	21	教員の教科観の共有、授業内容・指導方法・評価方法を検討する場として教科部会を機能させる。(組織)	ア)教科部会や研究授業検討会において、指導方法・課題の出し方・課題の取り組みせ方を共有できるようにする。 イ)各先生方、学年部、系ごとの取り組みの情報交換・情報共有を行い、教養科学科の数学科としての指導方針を確立する。 ウ)新学習指導要領に適した三観点評価法を共有する。	ア)横並びの先生方が部会以外の時間も使い、情報共有することができた。 イ)各々の先生方が生徒集団に合わせて創意工夫を行って授業を行ったり、課題を課している。「教養科学科の数学科として」はまだ不十分であると考えが、生徒のレベルや目標が年によっても違うのでなかなか難しい。 ウ)今年度初めて三観点評価をつける先生もいる中、工夫をしながら評価をつけることができた。	B
理科	22	学年ごとに存在する教科としての課題を踏まえた授業改善、指導案の構築そして学年間での情報共有	ア)中学部と高校一年部の授業では、クロームブックの導入を意識した授業案を策定し、共有する。また、特に中学部と高校一年一貫クラスでは6年間を意識した一貫教育の在り方を検討する。 イ)高校二年部の授業では、特に理系選択の4単位科目における三観点評価方法を検討する。また、次年度の3年部における授業への連携も意識した評価方法を実施する。 ウ)旧課程で実施する最後の学年ではあるが、共通テストに対応した学力の増強方法を意識して授業を構築する。三観点評価は実施しないが、高2年部の授業でも参考となるような授業法を構築する。	ア)クロームブックの導入は、特に物理基礎での活用が目覚ましい。映像資料の活用や復習クイズの導入など各担当や科目で構築中である。一貫生では、半年先取りという方針が定まり、各学年で連携をとり進捗を調整しながら進めている。 イ)いずれの科目でも受験準備を意識しながら授業を進めつつ、生徒達自身の自己評価シートや課題レポートの活用など、科目の特性に合わせた方法が構築され定着したのではと考える。 ウ)本年度はこの数年でも共通テストの出来が特に良かった。その過程で構築された講座や指導方法は次年度以降にも行かせるものだと思える。新課程に切り替わるため、そのままでは生かせないが教科として生かしていきたい。	A
	23	薬品の精査と管理徹底および理科室内の備品の整理と点検	ア)薬品の残量などの定期的な点検を本年度も実行し、三観点評価の評価材料として、および授業効果の向上のためにつつがなく実験を安全に行える環境を整える。年3回の点検時期を設けている。 イ)実験を実施する授業が年々増えている。そのため、基本準備として校内の備品や消耗品の整理と点検を1年間をかけて実行し、数年先を見越した購入案の作成を目指す。	ア)薬品の定期点検と適宜補充は予定通り行っている。実験を実施する授業も増えた。一方で、廃液の量が例年になく増加した。来年度以降の廃液処分に必な予算は新しい課題である。教育効果としてはプラスに働く状況に進んだと考える。 イ)本年度の機材購入は完了した。数年来の課題でもあった顕微鏡のメンテナンスも一部行うことが出来、予定通りである。現在、機材の価格高騰が著しいが、来年度は予算が十分に取れそうなので、購入計画も予定通り進む見込みである。	A
教科	24	生徒の学力向上のため、組織的な指導体制を確立させる	ア)共通テストの平均点を探究系は全国平均点の+10%以上、その他は-5%以上を目指す。 イ)各学年部、シラバスに沿った形でより細かな進捗表を作成し、年度はじめ・年度末に改善を図り、各学年で統一した指導に努める。 ウ)成績不良者について随時情報共有を行い、定期試験前後だけでなく必要に応じて適切なサポートを行う。	ア)共通テストの全国平均点が118.8点であったので目標値は、探究系が139.1点以上、一般クラスが111.1点以上となる。探究系は目標値+8.4点と大きく上回り、一般クラスでは目標値-1.76点と僅かに下回った。3年間、6年間の指導の一つの評価材料として、教科として概ね満足できるものと考ええる。 イ)シラバス作成はこれまでより多くの教員にしていたが、3年間・6年間のカリキュラムマネジメントを英語科全体で共有することができた。 ウ)教科部会では適切に情報共有が行われた。赤点対象者のみならず候補者に対しても、指導が計画的・継続的に行われた。	A
	25	観点別評価における評価材料、評価方法及び評価基準を確立させる	ア)新課程である中学部・高校1、2年部は毎週木曜日に分科会を開催し、年間を通して観点別評価について議論を行い、より良い指導体制を確立する。 イ)分科会で議論した内容について、教科部会にて情報共有を行う。 ウ)学び点の中に、学年全体で評価する材料を4項目以上設定する。	ア)情報共有を密にし、学年統一の評価基準で評価材料を蓄積し、適切に評価することができた。 イ)評価材料や評価基準はデータとしてまとめており、スムーズな引き継ぎが可能である。 ウ)「単語コンテスト」、「音読テスト」、「朝テスト」、「オンライン英会話」などを統一の評価材料とした。高1音読テストはクロムブックを活用した評価体制が確立しつつある。	A
	26	実用英語検定など、4技能資格試験におけるスコアの伸長を図る	ア)中学3年生及び高校1～3年生に対し、各クラス5回のオンライン英会話を実施・運営する。 イ)高3外部探究系において試験導入したweblio studyの効果を検証し、他学年でもテストを繰り返し、来年度以降のリスニングの指導体制の拡充を目指す。 ウ)3回実施する実用英語技能検定受験者の延べ人数として、350名以上を目指す。高校卒業時に、2級取得率5割、準2級取得率8割を目指す。	ア)全クラス予定通り滞りなく実施された。 イ)WeblioStudyは生徒からの評価も上々であり、共通テストリスニング高得点にも繋がったため、来年度は高2・高3全クラス通年実施することとなった。クロムブック活用の面もあり、一層計画的に活用し、成績向上に繋げていきたい。 ウ)様々な形で受験を促した結果、対前年比約2倍、延べ800名を超える生徒が受験した。大学入試において外部検定試験を利用する大学が増えていることも一因であろう。卒業時における英検取得率は準2級は約50%、2級は約40%という結果であった。特に準2級は目標を大幅に下回ったが、そもそもの数値目標が挑戦的なものであったので、共通テストの結果も踏まえると十分に評価できるものであったと考えている。どのぐらいの数値目標が適切なのか、結果を検証し、来年度に繋げていきたい。	B

教務部	保体	27	保健体育の授業を通じて、将来に渡って活躍することのできる基礎体力と実践的な知識の獲得を促進し、成長を実感し、静学に入って良かったと思える土台づくりをする	ア)新体力テストの計測を春先に行い、目標を立て、実践する内容を把握した上で、基礎体力の向上を年間通じて取り組ませる。また、各学期ごとに振り返りをして修正をしていく。 イ)運動量の確保をするために、礼節やマナーのためにも授業の開始時間をきちんと守り、できるだけ充実した活動を送れるように意識して取り組む。 ウ)保健においては、ICTを活用し、レポート作成やグループワークを通じて、自分の考えにない知識や実践力を養い、行動に繋げていく。 エ)体育授業のみならず日常の生活で活かされる礼節を身につけさせる。(服装・挨拶・態度の徹底)	ア)春先に新体力テストを実施し、秋の本番のために目標を設定させ、そのために必要な運動や意識を学期ごとに行わせ、それを評価にも絡ませることができた。 イ)毎授業で行っていた授業振り返りの分量を学期途中で調整しながら、運動量の確保という面にも貢献し、生徒の満足度の向上に繋げることができた。 ウ)環境レポートの作成においては図書館とも連携し、新聞記事を検索させたり、iPadやクロムブックなどのリソースを有効活用した。 エ)体育では他の教科と違い、動きがたくさんあるので性格や協力体制が見えやすく、担任とも情報共有ができた。	A
		28	豊富な運動量を確保して体力の向上を目指しつつ、問題点を把握したり、解決方法を導き出し、気づきと発見を促し、知的好奇心を刺激する。	ア)毎時間の振り返りシートを多くの分量を書くことを促しつつ、内容だけでなく、気づきや発見が大切であると周知して取り組ませる。 イ)新体力テストの振り返り、グループ練習での協働作業を通じて、自分の意見を他者に伝え、他者の考えを聞く機会を設けることで、頭を使いながら体を動かせるようにする。 ウ)ICTを活用して振り返りをしたり、動画を保存してフィードバックを得たりと、従来の形ではない体育の授業展開ができるように工夫する。	ア)毎時間の振り返りシートだけでなく、グループ活動の用紙も活用して思考や判断を大切にしたい授業実施ができていると思う。また、運動量の確保のために来年度からはもっとメリハリをつけた形を模索している。 イ)グループでの活動が増え、それに対して慣れてきてスムーズにコミュニケーションが取れている様子が見られる。それをより評価に細かく反映させることができるように改善していきたい。 ウ)動画の保存や活用に関しては一部の教員では試験的に行ったものの、全体通じて共通の認識とはならなかったため、要検討。	A
		29	新課程に関する授業内容の改善、評価方法の見直しを進めながら、生徒の教育効果を高め、満足度を上げる。	ア)体育科の中で連絡を密に取り、授業内容の改善を常に図り、生徒の充実度はどう繋がっていくかを指定の教科部会だけでなく、臨時でも開催して進めていく。 イ)他校の事例を参考にして柔軟に取り入れていき、今までやってきた方法にプラスアルファができるように工夫していく。 ウ)頭を使いながら、気づきと発見を重視して取り組むことで、体力要素が向上するように働きかけていく。	ア)体育科は仲間意識も強く、常にコミュニケーションをとりやすいため、柔軟に対応できるように努めている。また、私学研修会で得た知見をもとに、来年度以降の改革に努めたい。 イ)私学研修会、新人研修会や他校の事例を聞いて、本校に実情に合致した方法を常に模索し、10年後を見据えた展開を考えて実践している。 ウ)今年度は新体力テストの優良校になったこともあり、結果として向上が見られていることも自信に繋がるため、継続したい。	A
	技術・家庭	30	生活と技術についての基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けるようにする。	ア)グループワーク、発表を通して意見交換をさせながら、各自の考えを深めさせる。授業前と授業後の振り返りを確認する。 イ)感染症などに対応をしながらの、保育実習・調理実習などの体験の場をつくる。 ウ)生徒の参加型授業作りについての情報交換、研修会への積極的な参加をする。	ア)積極的に意見交換の場を設け、生徒自身が考える機会をつくることができた。授業の振り返りをさせ、評価に反映することができた。 イ)保育実習、調理実習ともほぼ計画通りに行うことができ、生徒に体験の場を提供することができた。 ウ)研修会の参加はできなかったが、教員間での情報交換を積極的に行うことができた。	A
		31	実技・実習を通して生活的自立のスキルを身につけ、協働の力を育む。また、生活に役立つ作品作りを通して、ものづくりの喜びを知らせる。	ア)技術:PC教室を活用した実践的・体験的な授業を実施 家庭科:作業短時間を取り入れた調理実習(中3:3回、中2:3回、中1:1回、高2:4回) イ)技術:木工作品(中1)、LED電気スタンド(中2)、プログラミングを利用したロボットの製作(中3) 家庭科:エコバッグの製作・洗濯実習(中1)、アニマル座布団の製作(中2)、エプロン制作(高2) ウ)浴衣の着付け体験(中1)、新生児人形での保育体験(中3・高2)、高齢者疑似体験(中3・高2)、絵本・紙芝居の読み聞かせと保育実習(中3・高2)	ア)体験的な授業の場として、外部講師を招いての授業を計画・実行することができた。 イ)各学年、計画していた実習・製作を安全に留意しながら行うことができた。 ウ)体験や実習を多く取り入れることを意識し、知識だけではなく技術が身につくような授業をすることができた。	A
		32	生徒が充実し安全に実習や製作に取り組めるように実習室の環境を整える。	ア)備品の整備、点検、補充。包丁の手入れ、消耗品の補充を定期的に行う。ミシンの整備点検(5月)、備品の購入は2学期までに計画的に行う。 イ)調理実習室の衛生管理を実習ごとに実施。(まな板の確認、引き出しのチェック、冷蔵庫内の整理)工具等や消耗品の整理 ウ)技術家庭科実習室の用具や教材の保守点検。生徒作品の管理の徹底。	ア)消耗品を定期的にチェックし、授業に支障のないよう購入することができた。 イ)調理実習室を使用する機会が昨年度より大幅に増加した。授業での使用に関しては衛生に注意しながら使用することができたが、静学祭の模擬店での使用後のチェックが十分でなく衛生管理に問題が生じるがあった。 ウ)昨年同様、技術・家庭科実習室の稼働率が高く、整理・点検がままならない期間ができてしまった。	A
	芸術	33	教科の本質を踏まえた授業により、生徒が生活や社会の中で芸術や芸術文化と豊かにかかわる資質・能力を育成する	ア)周囲の世界や自然環境を深く観察し、そこから「美」「調和」「多様性」「面白さ」等を感じ取ることができるしなやかな力を育む。 イ)鑑賞授業の工夫・充実に努め、芸術文化に対し、そのよさや豊かさをどのように味わっているかを自分の言葉で表現し自分の思いや意図を周囲に伝える力を育む。 ウ)表現技能の習得のみを学習の目的とせず、インフォーマルな学習を通して生徒の内発的な表現意図を高める工夫を行う。	ア)自然観察をしながら三原色を使って色づくりをする中で充実した制作を行うことができ、細やかな感性を養うことができた。 イ)友人が製作した作品を鑑賞して対話やワークシートを通した相互鑑賞やアートカードの活用により生徒自らが美術作品を鑑賞したと感じたことを通して鑑賞の資質を広げ深めることができた。 ウ)「生活や社会において芸術教科が果たす役割」を課題として既習事項や生徒一人一人の経験を基に学び合いを行ったが、お互いの多様な考えを尊重しながら考えを広げていく生徒が多く見られた。	B
		34	教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせ、社会や文化と深くかわかる学習過程を創造する	ア)2年間の課題全般を通し、日本と西洋の価値観や世界観の相違を学び、日本文化を客観視できるようにする。 イ)社会という「場」にかかわる題材を年間指導計画に設定し、制作過程や成果物の展示・掲示を年間3回は行い、校内外へのアピールを積極的に行う。 ウ)常に教科の「見方・考え方」を念頭に授業を進めることにより、教科の本質を踏まえた学習内容や学習プロセスを設定し、「深い学び」の実現を目指す。	ア)日本に親しみをもつキャラクターデザインに関する課題では、日本文化について意見を出し合い、その内容をデザインに生かすことができた。コンクールでは準グランプリに入賞する生徒も見られた。 イ)大衆文化と芸術の関わりを問い直すポップアートの意義とその手法を学習し、芸術が社会に及ぼす役割について考えることができた。校内展示も実施できた。 ウ)知識・技能の習得だけではなく、身の周りの生活と関わらせてそれらを活用させていくことにより、生徒一人一人が主体的に取り組む学習活動を行うことができた。	A
		35	適切な評価基準を設定し、単元や題材のねらいを明確にする	ア)日々の授業において、生徒とのコミュニケーションを密にとり、表現に至らないイメージ、言葉に置き換えられない世界等を丁寧に見取り、基準に基づいた生徒自身の客観評価を毎回実施する。 イ)生徒が課題に主体的に取り組むことができるような評価活動を行い、部会内で協議検討を行う。 ウ)生徒一人一人が教科の本質に迫るような魅力的な課題づくりを行い、生徒が探求的に学ぶ単元を年間1単元は実施し、学習活動や成果物をインフォーマルに評価するパフォーマンス評価を実施する。	ア)時数の少ない教科であるので、生徒の学習の定着を見取る場面を精選し、ワークシートや振り返りシートを工夫し生徒の内面の変化を捉え、学習への意欲化を図った。 イ)各授業の実践を報告・協議することはできたが、コロナ禍の状況や教員同士の授業シフトの課題もあり実際に互いの授業を見合いながら研究を深めることは難しかった。 ウ)単元において課題設定を工夫し、生徒が課題を自分事として捉えたり、既習事項とのずれや疑問を感じた時に意欲的に友人と学び合う姿が見られた。今後も主体的・対話的な学習を目指したい。	B
	情報	36	生徒一人一人の好奇心を高めながら、情報機器を表計算による統計処理や情報整理、プレゼンテーションによる表現の道具として適切に活用できるように育成する。	ア)中学までの習得状況に差があるので、全体のスキルの底上げができるよう丁寧に説明する。 イ)小中の学習を基礎に、身近な事例をもとに情報に関する応用力を育てる。 ウ)全体的イメージを図版やイラスト・アニメーションを用い興味を持てる学習に心がける。	ア)基礎的な内容から丁寧に扱うことで、全体のスキルの底上げができた。 イ)ワープロ、表計算、プレゼンテーション、新しく加わったプログラミングについては、実習を通じて知識、技術の習得ができ、特にワープロ、プレゼンテーションについては他教科でも使用できた。 ウ)ワープロやプレゼンテーションソフトにイラストや、アニメーションを入れながら文書やスライドを作ることができた。	A
		37	情報の収集・処理・表現を通して広くコミュニケーション能力を養い情報社会に積極的に参画する態度を育てる。	ア)インターネットから情報の収集を行い、整理しまとめスライドに表現することで情報の検索・収集能力を養う。 イ)生徒一人一人が作成したスライドを発表し、相互に評価し合うことでコミュニケーション力を養う。 ウ)情報の収集、処理、発信の基礎的な知識の習得およびマナーとルールの必要性や情報に対する責任について考えさせる。	ア)インターネットから情報の収集を行い、整理しまとめ、スライドとして発表することで情報の検索・収集能力が培われた。 イ)生徒一人一人がスライドを作成し、クラスで発表、互いに評価することでコミュニケーション力が培われた。 ウ)情報の収集、処理、発信においてマナーとルールおよび情報に対する責任について考えさせることができた。	A
	教務課	38	教務課から全教員への周知事項を徹底し、全教員が共通認識を持って教育活動を行い、教育活動の円滑な推進を図る。	ア)定期試験の実施方法やルールなど、全教員が共通認識を持つため明文化したものを作成し、その時期に応じて随時情報発信を行うことで、全教員が共通認識を持って教育活動を行えるような体制を整える。重要な内容はそのイベントの7日前までに概要を発信する。 イ)常に新任の先生の目線で、いつ・どこで・何を・どのように教育活動を行うのかを明確化できるように教務課から全教員に情報を発信する。 ウ)情報の発信方法としてはメールやBLENDを使用するが、それらに頼らず直接コミュニケーションをとって確認し合うことも大切にする。	ア)前期の反省を生かし、早めの指示出しを心掛けた。完璧とは言い難いが、情報を発信する教務課も受け取る先生方もツールの活用にも慣れつつあり、来年度以降のさらなる連携が期待できる。 イ)先生方に行っていたく業務について、締切をまとめたファイルを用意した。その時点での優先順位がわかりやすくなった。 ウ)多くの先生方が教務ホワイトボードを気にしてくださるようになり、感染症への対応(学級閉鎖・授業代行など)に関するスピードと正確性が高まった。	A
		39	教育活動が滞ることがないように配慮する。教務備品の管理を確実に行う。また、緑風塾・特別活動、学校行事について、先を見通しながら企画・情報配信を行う。	ア)教務備品や印刷室内の備品・印刷用紙の状況を日々把握し、不足分を早めに補うことで、教育活動が滞ることのないようにする。また、視聴覚機器については視聴覚ワーキンググループの委員と連携を取り、破損などがないか確認し、常に最善の状態教育活動が行えるようにする。 イ)緑風塾や特別活動については、学年主任とも連携をとりながら生徒にとって有益なものとなるように企画し、教員がどのように運営すればよいかの情報配信を行う。合わせて学力向上につながるように各学年部や進路部とも連携を図る。 ウ)月行事や週行事と日課について情報配信を確実に行い、特に非常勤講師への日課連絡に漏れがないように配慮する。また、BLENDへの出欠入力について周知し、入力確認の流れを検討する。	ア)教務備品については前期に引き続き不足状態を招くことはなかった。プロジェクターについては、機材の交換が難しくその場しのぎにならざるを得ない。後継機器の検討を始めている。 イ)緑風塾や特別活動は、主に学年主任が工夫した運営を心掛けてくれており、かなり充実したものとなっている。学習面では、定期試験での成績下位層に対して教科及び学年から手厚い指導がなされ、学力向上について一定の成果をあげている。 ウ)行事予定関係の発信は毎回確実に行われている。出欠入力の点検および督促については、声掛けを増やした結果、未入力は減ってきているが、まだ課題として残っている。	A
		40	教務課内の協力体制の強化に加え、日課業務について情報管理課や研修課とも協力体制を築き、関連する業務を共有し協力体制を整える。	ア)教務課全教員が教務課として行う任務を可視化し、常に誰がどのような業務を行っているのか把握できるようにする。また、お互いに業務の進捗状況を確認し合えるようにする。 イ)日課業務など教務課以外の先生方と協力体制を強化するため、年間の教務課スケジュール表と日々の業務内容をまとめたものを作成し、業務を可視化することで先を見越して業務を行えるようにする。変化する学校行事や教務システムに合わせて、学期に1度はスケジュールの見直しを行う ウ)授業日は朝7:30に集合し、日課・時間割変更・代行を確認し合う。また、時間割作成や試験本部の運営などチームとして行う業務については、役割や業務内容の采配を工夫し、チームとして有機的に機能できるようにする。	ア)各課員が主体性を持って状況把握につとめるようになった(特に2024年に入ってから)。未来の学校組織の中核を担うであろう人材が育ちつつある。 イ)前期に引き続き部課長会議は定期的に行えている。教務課としては、情報管理課の援助を得つつ、研修課のリクエストに応えることができた。 ウ)毎朝7:30に教務課員が集合し、周知事項を確認し合った上で、主に時間割変更と代講を連絡した。時間割作成や試験運営でも揺るがぬ協力体制を構築できた。	A
		41	静岡県「ふじのくに学校教育情報化推進計画」・法人の新高校整備計画・情報セキュリティ基本方針・インフラ整備提案依頼書などに従った情報システムを構築する。	ア)生徒一人一台に伴うインフラ整備、40台のchromebookを用意し、教員指導、生徒の故障時の対応として使い、学習に支障が出ないように整備する。 イ)高校生生徒用端末を80台更新し、安定したオンライン環境を整える。 ウ)PC教室のPC49台、ノートPC40台を更新し、セキュリティーの高い安定した環境を整える。	ア)5月中に一人一台PCのchromebookが生徒に引き渡され、当初学年370台の同時接続による障害もあったが、firewallのupdateやwifi速度の見直しやIPアドレスの追加により解消された。 イ)オンライン英会話に用いる予定のiPad80台および、授業用windowsPC(デスクトップ40台、notePC40台)について納品が済み、授業、緑風塾など有効に活用されている。 ウ)コロナ等による出席停止や学級閉鎖中におけるハイブリッド授業や、朝礼や学年集会など、端末と視聴覚機器をスムーズに活用することができた。	A
	情報管理課	42	教務課・研修課・進路課と連携し、各アプリケーションにおける操作、データ連携を高める。	ア)新しい連絡システムBLENDを利用しながら、その使い方を習熟できるよう研修を行う。 イ)一人一台PCの導入とともに、その扱い方及び授業での活用の仕方の研修を行う。 ウ)学年ごとの処理の担当を決め、担当を中心として業務を行っていく。	ア)年度当初教務課と連携し、時間割作成、eー教務および本年度から導入したBLENDへの入力を行いスムーズに開始することができた。 イ)中学生・高校1年生に対する新しい評価法、成績表の変更などの実施に対する環境が整った。また、実施後教務課からの改善点をすぐにeー教務およびBLENDで反映することができた。 ウ)研修課より依頼された、chromebook活用研修を、教務課とともに協力して行うことができた。	A

分	掌	研 修 課	43	学校と、保護者・生徒との連絡、成績の一元化を目指す。	ア)新しい連絡システムBLENDを利用し、速く正確に多くの情報を保護者及び、生徒へ提供する イ)必要な情報を学校から直接の連絡を増やすことで、連絡の遅延をなくす。 ウ)情報システムを授業に取り入れることで、生徒一人一人に対応した教授手段の研修をすすめ、推進していく。	ア)インフルエンザ・コロナ等による出席停止や学級閉鎖の生徒に向けて、Zoomによるハイブリッド授業を一部の実技系科目以外の全ての教科・科目で行うことができた。 イ)e-教務を用いて、成績、観点、評価の入力から成績表・通信表・調査書の出力まで、滞りなく行うことができた。BLENDを用いて出欠管理、生徒連絡、保護者連絡、成績公開を行うことができた。 ウ)本年度より導入されたBLENDを用いることにより家庭からの毎日の出欠連絡、HRでの出席登録、保護者生徒へ定期試験、学期評定などの公開、教員・生徒・保護者をまとめたグループウェア連絡などに用いることができた。ただ、帳票出力などe-教務に頼らざるを得ない部分は残っているが徐々に改善されつつある。	B
			44	教員の授業改善および授業力向上を図る。	ア) 教員一人一人が1回目の授業評価アンケートの結果を踏まえた授業改善計画書を作成し、具体的改善策を講じる。2回目の授業評価では、「総合評価7項目平均」および特に重要な項目である「学習効果」について全教員平均で76ポイント以上を目指す。 イ) 年2回、保護者に対して授業を公開し意見を募る。また、参観者の授業力向上を目的とする研究授業を各教科年1回実施し、外部識者を交えて勉強会を実施する。研究授業については、1回あたり10名以上の参観者を目指す。 ウ) (イ)に加え、授業ノウハウの紹介と蓄積を目的とする研究授業を各教科年1回実施する。	ア)9名の新任教員について、研究授業を一学期中に実施した。年度の早い時期に実施することで新任教員の授業力を確認することができた。また、その後の教科部会を通してベテラン教員が助言し、授業力の向上を図った。2学期にも4名の新任教員が2回目の研究授業を実施した。 イ)新任以外の教員については、外部支援教員を招聘し各教科1名ずつ研究授業を実施した。その後の教科部会を通して授業力向上の手法を学んだ。また今年度から特に指導が優秀と認められる教員については、その手法を共有することを目的とした研究授業を実施した。授業の様子は映像で保存し、本校教員ならばいつでも閲覧可能とした。 ウ)授業評価アンケートを年2回実施した。全教員が授業改善計画書を提出し、1回目のアンケート結果で判明した改善点について具体的対策を講じた。年2回のアンケートにより、年度中の授業改善学習効果の75ポイント達成率は52% (前回50%)で改善傾向である。高3は+3ポイントの有意な改善が見られた。	A
			45	研修を通して教員の資質能力の向上を図る。	ア)静岡県県学協会主催の校外研修は原則参加し、その他資質向上に資する校外研修や自主的研修を奨励する。 イ)教員の要望を把握し、必要な校内研修を企画する。特に全体研修については、研修後にアンケートを実施し研修の満足度や問題点を調査する。肯定意見75パーセント以上となるような研修を企画する。 ウ)大手予備校等で実施する教員向けセミナーへの参加数15名以上を目指す。	ア)新任教員に対して、教務ガイダンス、管理職講話、教頭面接、成績処理研修等、各種新任研修を通し資質能力の向上を図った。その他、オンライン研修システム「Findアクティブラーナー」を使った新任研修を奇数月に実施した。今年度はトータルで12回(昨年度6回)の新任研修を実施した。新任研修は充実しつつある。 イ)教員全体研修を年5回(昨年度6回)実施した。1回減少ではあるが当初の予定通りである。今年度は必要な時期に必要なものを提供できたと思う。また、全体研修ではないものの中学部からの要望により、発達障害の生徒に対する対応の仕方研修も実施した。各部署の要望にも対応することができた。 ウ)私学協会研修に延べ46名、予備校研修に16名が参加した。学校運営や教科指導、生徒指導等の能力向上を図った。昨年度より15名増加している。新課程への過渡期でもあり、研修への参加希望者は多い。	A
			46	教務部の各課と連携し、円滑な業務遂行を図る。	ア) 教務課との連絡を密にすることで、研究授業や研修時の時間割変更を確実に行う。 イ) 情報管理課と連携し、研修コンテンツの拡充を図る。また、オンライン研修についても協力し、円滑な運営を図る。	ア)教務課とは教務ガイダンスや教育実習ガイダンスの説明、研究授業や教育実習での時間割調整、授業評価アンケートの時間割作成等多岐にわたって連携した。ただ、自身の業務に追われてコミュニケーションが不足したがゆえの連絡漏れがあった。 イ)情報管理課とは教務ガイダンスや教育実習ガイダンスの説明、授業評価アンケートでのパソコン入力指導、教育実習における情報機器の準備・片付け・操作方法の説明等、多岐にわたって連携した。 ・上記以外にも、研修業務の準備や片付け、運営で人員が不足した場合は各課から人員を回してもらう等サポート体制が整っていた。	B
		生徒指導課	47	生徒の自主性、主体性の育成を目指した生徒指導。	ア)生徒会活動への指導と支援により、生徒の自主性・主体性を育む。 イ)ボランティア活動の指導と支援により、生徒の自主性・主体性を育む。 ウ)部活動の活動や大会・発表会のアナウンスを行い、お互いに応援し合う雰囲気づくりを行う。	ア)生徒会・体育委員を中心に、制限なしの静学祭、体育祭を行った。生徒にとって、初めての経験だったので、準備がとても大変だったが、生徒が主体となり成功させることができた。 イ)献血ボランティア、東北ボランティア(3.11朝礼にて発表、来年度訪問に向けての事前準備、文化祭での発表)、サマーショートボランティアの呼びかけ、能登半島地震での募金活動、ペットボトルキャップ集めボランティア、サッカー全国大会応援生徒へのゴミ拾い呼びかけ等を行った。 ウ)野球応援、サッカー応援を全体に呼びかけ実施した。強制ではなく希望者で行ったが、沢山の生徒が参加、希望してくれた。生徒同士、応援しあう気持ちが高くなっている。	B
			48	学校生活における基本的生活習慣の習得、自らルールを守る心づくり。	ア)風紀委員・交通安全委員による活動を活発に行い、生活習慣の改善を促す。 イ)登校指導による交通指導・声かけ運動の継続、学校周辺の見回りにより、学校生活に対する基本的生活習慣の基盤、安全を確立する。 ウ)学校生活アンケート(いじめアンケート)を実施し、安心して学校生活を送る環境づくりを行う。	ア)風紀委員による朝礼、クラスでの呼びかけ活動を行っているが、まだまだ徹底できていない。しっかり守れている生徒もいるが、守れていない生徒もいる。今後の改善が必要。 イ)登校指導による交通指導・声かけ運動を行ったが、その場はしっかりとルールを守ることができるが、学校付近から離れたと、誰も見ていないとルール・マナーが守れない生徒がいる。これからも呼びかけていく。 ウ)学校生活アンケートを3月初旬に実施予定	A
		生活部	49	心身共に健康な学校生活を送るため、生徒自身で健康管理できるようにする。	ア)各種健康診断を実施し、必要に応じて受診依頼を出すなどの事後指導を行う。 イ)日常における観察を行う(HR、授業、課外活動、保健室など)。生徒が保健室を利用した際は、記録を電話連絡およびBLENDで担任と共有する。 ウ)孝友日誌に体温と体調を記録させる。	ア)生徒に対する健康診断をすべて行うことができた。また、本年度より生徒健康診断日(4/20)を設け、1日で効率よく終わらせるよう試みた。来年度は業者を増やし、教員も測定に回ることで効率をあげていく。 イ)養護教諭がBLENDに保健室利用状況を入力し、担任や学年部と共有できた。生徒の欠課情報が記録に残るので、担任としても把握しやすかった。 ウ)体温の記録について、5類以降後は実施しなかった。来年度は、感染症による欠席が増えたときに感染状況などを中央階段に設置し、感染予防につなげていく予定。	B
			50	感染症の予防、対策を行う。	ア)「保健だより」を月1回発行する。(おもにBLENDで配信。必要に応じて教室掲示。)その他、啓発ポスターを掲示する。 イ)生徒保健委員会を開催し、生徒に対する啓蒙活動を行う。 ウ)手指消毒液の設置(各階の手洗い場、食堂、図書室前、事務室前、体育館など)、本校の状況に合わせた対策を行う。	ア)毎月一回、保健委員の生徒が保健だよりを作成し、保健室前に掲示、およびBLENDで配信した。生徒が自分で情報を調べて作成するので、興味深いものができた。 イ)4/12、8/29、(2/29予定)に生徒保健委員会を開催し、感染症予防や、熱中症対策について各クラスで行うよう指導した。また、高2・3生については献血の協力呼び掛けを行った。献血は例年並みの生徒に参加してもらうことができた。 ウ)各階の手洗い場、食堂、図書館、体育館、事務室前、教員室に消毒液を設置し、こまめに消毒できる環境を整えた。コロナ・インフルエンザB型の流行もあり、朝礼やHRでマスクの着用を呼び掛けた。今後も感染者数が増えた時は、校医と相談できる限り「マスク着用・消毒」の指示を出す予定。	A
			51	生徒のレジリエンス(心の回復力・しなやかさ)を育てる。	ア)BLENDを通じて「こころの健康実態調査」を実施し、結果から生徒の様子を判断し必要に応じて面談を行う。 イ)学年部、養護教諭、スクールカウンセラー、教育相談担当で情報共有の場(=KGH)を月1回設ける。 スクールカウンセリングの周知徹底を行う。 ウ)学年部での生徒の実態の情報共有を促す。また、スクールカウンセラーからの助言をもとに、生徒や保護者への対応を行う。中学1・2年生、高校1・2年生(探究クラス中心)に、外部講師によるレジリエンス教育(=静学SEL)を行う。	ア)5/15～18にBLENDアンケート機能を用いてこころの健康状態調査を実施し、心配な生徒について生活部教員による個別面談を行った。来年度は、内容・実施方法を精査し、中学・高校で別のアンケートを実施する。 イ)学年ごと月に一度、教育相談(KGH)を行い、生徒の情報を共有した。担当教員に加え管理職にも参加していただき、学校としての配慮や指導について相談した。スクールカウンセリングのお知らせを掲示、BLEND配信し保護者・生徒に周知した。BLENDを利用したことで、今年度は保護者の利用が増え、保護者の心のよりどころができ、結果的に生徒にも良い効果があったのではないかと考える。来年度はソーシャルワーカーとの連携がとれる体制を整えてもらいたい。 ウ)KGHで検討した生徒に対する配慮などについて、担任や学年主任を通して保護者対応をおこなった。4/10、7/28、8/25、10/20に中高1・2年生(高校生は探究系)対象にレジリエンス講座(=静学SEL)を実施した。生徒からのフィードバックの共有ができていないので、来年度の課題である。また来年度は期間、内容を検討して実施する。	A
		安全整備課	52	学校施設の平時・非常時における機能的な防災安全体制の構築。	ア)地震防災・災害対策計画(地震対策マニュアル)の運用及び、防災倉庫の管理 イ)一斉メール(現在登録85%うち閲覧率83%)も含めた災害への対応 ウ)学期ごとに異なる防災訓練の実施、生徒の活動を主とする訓練の実施	ア)・新任教員へ地震対策マニュアルを配布し、職員会議を通じて周知を図ると同時に「地震防災・災害対策組織教員配置表」を作成し、災害に対して組織的に対応できるようにした。 ・防災倉庫については、随時非常食の入れ替えや備品の確認を行った。 イ)全ての生徒・保護者が登録している校務支援システム「BREND」は、日常の連絡にも活用されており閲覧率が高いため、一斉メールと併用することで伝達を徹底できるようになった。 ウ)1学期は避難経路の確認、2学期は予告なしの避難訓練、3学期は学年別の訓練を実施した。特に3学期は生徒の活動に重点を置き、防災への意識を高めることを目的とした。	B
			53	定期点検や危険箇所への対処を万全なものとし、施設・設備の改善、保全を図る。	ア)計画的な生徒用机イスの入れ替え。(故障があり生徒がけがをする恐れのあるものを早期撤去) イ)校舎内・グラウンドなど学校施設の定期点検の実施(施設のみならず、構造的に事故の恐れのある場所の解消) ウ)清掃用具・備品の点検を行い、速やかに補充・改善を行う。	ア)今年度は傷んだ机・椅子を優先的に100セット廃棄し、代わりに新しい机・椅子を120セットを入れ替えた。次年度以降も計画的に入れ替えを行っていく予定である。新しい机・椅子は移動しやすく、教室のスペースも増えるため、生徒が安全・快適に学校生活を送ることができと思う。 イ)安全整備課だけでなく多くの教職員の目でチェックを行い、助言をいただきながら優先順位を決めて対応した。 ウ)ほうきなどの清掃用具については年度初めに余裕をもって補充をしたため、現時点では問題なし。ゴミ袋などについては、随時補充を進めていった。校舎入口の傘立て・置き傘の問題については、教室に傘立てを設置する新しいルールを定め解決を図った結果、効果があった。	A
		進路指導課	54	進路シラバスに基づいた進路指導計画を実施するとともに、進路指導室の活用を促す。	ア)進路行事の目的を各学年進路指導課教員を通じて生徒に周知し、生徒の進路意識を高め効果的に実施する。 イ)教科や学び支援課との連携により、生徒の進路実現にむけて多方面からのバックアップを行う。 ウ)進路指導室について生徒に周知し、進路指導室に入室する生徒の相談に積極的に応じる。	ア)進路シラバスに基づき、それぞれの学年の進路指導課の教員が進路指導を行った。年間定められた模擬試験の結果等を学年教員や教科担当の教員と共有することで、生徒の進路意識向上の為の声かけを積極的に行うことができた。 イ)ロングホーームルームの時間を使って、各学年の進路担当教員が生徒の進路意識向上の為の講話や資料作成をした。マイナビや夢ナビ、ベネッセ等の業者からの資料を用いて進路指導を進めることができた。学び支援課との協力で大学から講師を招き、生徒は専門的な内容や大学の特色などを学ぶ機会を得ることができた。 ウ)進路指導室にある大学受験の過去問題等の使用を生徒に促すことができた。また、小論文指導のガイダンスでは、進路指導室の資料の活用を促した。	A
			55	大学進学数値目標(国公立大学100、難関私立大学120)達成のために、補講を計画・実施するとともにテスト分析とフィードバックの仕組みを構築する。	ア)補講系SGTを効果的に実施するとともに、高校3年生の夏期・冬期特別授業中の補講や家庭研修中補講の充実を図る。 イ)ファインシステムやコンパス、マナビジョンにより、教員および生徒に振り返りの機会を提供する。 ウ)学年部との連携により、テスト分析会や講演会を企画実施する。	ア)補講系SGTを計画通りに進めることができた。また、模試対策等の単発の講座を設けることで、生徒の学習意欲を高めることができた。また、高3生に対して、夏期・冬期特別授業後、そして共通テスト後の家庭研修期間に特別講座を開くことで、進路実現をサポートすることができた。 イ)ベネッセが提供するファインシステムやコンパスやマナビジョンを活用することで、教員および生徒に模擬試験の振り返りの機会を提供した。生徒はマナビジョンを活用して、希望の進路を調べる活動を行うことができた。 ウ)ベネッセによるテスト分析会や講演会を実施し、生徒の現状把握をより細かくすることができた。また、他校の取り組みの成功例等を聞くことができた。	A

進路部	学 び 支 援 課	56	大学入試改革に関する情報収集を行い、進路指導計画へ迅速に反映させる。	ア)入試改革に関する研究会に積極的に参加し情報収集に努める。 イ)教員全体での小論文および志望理由書指導体制を確立する。 ウ)学年や教科と連携し、情報を共有する。	ア)新課程における入試改革に関する講演会等(代ゼミ、駿台、ベネッセ)に参加し、その情報を他教員と共有することができた。共通テストの新教科「情報I」に関しては、高2の冬休みから補講系SGTを開くことで、生徒の「情報I」への関心を高めることができた。 イ)小論文を課す大学受験が増えていく中、小論文指導に関しては昨年度同様、全教員に指導課の分野を登録してもらい、小論文の個別指導教官を割り振るという体制を継続することができた。今年度も100人を超える生徒が指導を希望してきたが、先生方の協力のおかげで、対応することができた。 ウ)新しい入試改革に関する情報は、その都度該当学年に伝えるようにした。学年の進路指導担当の教員や各教科の教員に任せる部分も多く、改善が必要であると感じている。	B
		57	SGTの外部講師講座は、毎年新しい講座を加えると同時に見直しを図り、体験を通じて各生徒の特技を増やしたり高めたりすることで、今後の生活で生かせる講座を提供できるようにする。	ア)部活動や分掌との共同開催を取り入れることで、部活顧問の人脈を活用した外部講師を招き、部活動に所属する生徒に加え、部活に所属しない生徒にも外部講師のレッスンを一般開放することで、学校全体で質の高い専門講師の指導を受けられるようにする。 イ)外部講師を呼びやすいように、謝礼の金額や支払い方法などの料金体系のガイドラインを定め、学び支援課と各部顧問との連携を取りやすくする。 ウ)従来から実施しているSGTの講座についても、人気のある講座は継続して実施し、部活や生徒会などに所属していない生徒にとっても本校での学校生活の活力となる場となるようにする。	ア)部活動との共同開催では、茶道部との共同開催で「着物解体新書」、理科部との共同開催で「静岡大学理学部・少人数制大学見学」を実施し、いずれも新規の講座であり、その部活に所属する部員だけでなく興味のある生徒への公開講座としての役割を果たせた。 イ)部活動との共同開催において、該当の顧問と募集から謝礼の支払いまで連携を取りながら、滞りなく開催することができた。 ウ)学校案内やホームページで紹介されている人気講座は、今年度も継続実施した。今年度はより多くの受講希望者があり、学校生活の活力の場としての役割を果たせた。	A
		58	SGTの講座(外部講師と内部講師の両方)の広報活動を工夫し、SGTの参加率を高める。	ア)部活動や分掌との共同開催を取り入れることで、部活顧問や部活に所属の生徒が一般生徒への参加を呼び掛けられるようにする。また、共同開催する部活に所属する生徒の参加が確保されることで、全体としてのSGTの周知や参加人数を高める。 イ)掲示用のSGTの案内チラシやSGTカレンダーを工夫し「いつ・どこで・だれが・どのような講座を」行うのが生徒・教員・保護者と情報共有できるようにする。 ウ)実施したSGTの活動の様子をまとめた「SGTレポート」を掲示やHPで公開することで、SGTの魅力が伝わるようにする。活動の写真に内容のコメントをつけることで、読者がSGTを疑似体験できるようにする。	ア)上記のように茶道部や理科部との共同開催をはじめとして、本校の卒業生からの持ち込み企画もSGTとして開催した。周知方法もBLEND(校務システム)を通じて、生徒と保護者の両方へ案内したことで、参加人数の増加につながったと考えられる。 イ)生徒・保護者・教員がいつ・どこで・だれが・どのような講座を」行うのかの情報共有がしやすいように、SGTカレンダーを随時発行した。また、外部講師による講座は、学校行事予定にも組み込んでもらうように教務課にも依頼して、周知を図った。結果として、今年度のSGTに参加した生徒数は、中学が75人(26.2%)、高校が85人(11.0%)となった。 ウ)SGTの活動中には、活動の様子がわかるようにシャッターチャンスを狙って写真に収め、SGTレポートとして掲示やホームページで紹介してきた。それぞれの写真に活動内容がわかるようにコメントをつけ、読者が写真を見ながら活動の様子を疑似体験できるように工夫してきた。	A
		59	分掌組織として機能するように、分掌内や関連する分掌外の組織との連携を図る。	ア)SGTの企画・運営について、担当者のみに一任するのではなく、課員全員と意見交換や議論を経て吟味し、より質の高いSGTを提供できるようにする。特に、若手教員の目線でのアイデアも参考にしにする。 イ)分掌外の連携の例として、「緑風塾」は各学年部、「外部講師によるSGT」は部活顧問に加え、各教科や各学年部との情報交換により、担当者1人では企画発案できないようなSGTを実施できるようにする。 ウ)複数のSGTの講座や学校行事がバッティングすることで、SGTの参加率が下がるため、むしろSGTの講座を精査し講座数を絞り込み、各分掌と連携し行事のバッティングがないように日程を調整することで、質の高いSGTに参加しやすくする。	ア)今年度は若手の新任教員が学び支援課に所属になり、SGTの運営に関わることで活性化や新任教員自身の研修にもつながった。 イ)今年度は卒業生による持ち込み企画もあり、その卒業生の元担任を通じて学び支援課に打診がありSGTとしての開催につながったという事例が2件あった。その他にも、本校教員の人数による持ち込み企画も1件あり、人脈の広さが多様なSGTの企画につながることも実践できた。 ウ)SGTの企画にあたり、学校行事や他のSGTとの兼ね合いを考慮し、バッティングがないように調整をしてきた。しかし、各部署で様々な企画を立てていることから、すべてのイベントを把握することが難しく、いくつかのSGTと別のイベントがバッティングしたため、受講希望の生徒がいずれかのイベントに参加できなくなってしまうという事例が発生した。	B
		60	入学式、始業・終業式、体験入学、入試説明会などの行事を、丁寧に遂行する。	ア)式典や朝礼などは、教室で配信映像を通して行う経験値を蓄えてきたが、その合理性を更に追求するとともに、対面で伝達すべきものとの見極めをしていくよう留意する。 イ)昨年度は、入試説明会の時期を12月に動かし個別相談会を併設し教員二人一組で相談にあたるなどの工夫を加えた。本年度も改善点を見つけ、行事の目的に叶った内容にブラッシュアップさせたい。 ウ)仕事を分担しながら進め、仕事を通じて結ばれる教職員相互の思いやご苦労に触れたり、仕事の意味合いなどに対する理解を深めたりする契機となるよう心掛ける。	ア)入学式の後実施したオリエンテーションでは、新しい試みとして、新入生と保護者とを分け、保護者にのみ教室にてリモート配信で実施した。その間新入生は、オリエンティング形式で学校を探索。1年部とタイアップした新企画は新入生に寄り添った初日を迎えることになった。 イ)感染症が落ち着いた後も、リモートの良さを継承しながら、対面での朝礼を組み合わせることにより、合理性を高めたことに加え、教育的な効果をも重ねることができた。 ウ)12月の入試説明会は、「入試説明会及び個別相談会」と名うって実施。150組ほどの受験生の相談を受けた。面接は教員2人1組で対応し、デリケートな質問に対しては応答について事前に細かな打ち合わせをすることで、行事を通し私たち教職員の理解や結束も深めることができた。	A
総務管理部	総務管理課	61	開校記念式・記念講演や芸術鑑賞などを通じ、良質な文化資本を提供し蓄積する。	ア)開校記念式における記念講演では、良質な知識人やアーティストなどを招き、生徒はもちろん教職員、保護者に優良な知見を提供することができる機会となるよう心がける。 イ)芸術鑑賞においては、生徒自らは触れる機会をもたないであろう作品を提供し、彼らの心情に何らかの痕跡を残す1日になるよう演目の選定と運営を心がける。 ウ)昨年度、開校記念式でのスピンオフ企画、SGT「帰ってきた上野千鶴子先生」のように、リモート技術を活用しながら、小規模ではあっても深い文化的経験となるような企画を実施する。	ア)5月の開校記念式記念講演は、文化人類学で立命館大学大学院(先端総合学術研究科)教授の小川さやか氏を講師に行なった。生徒にとっては馴染みの薄い文化人類学についての事前学習や、講演後、本校の図書館において小川氏を囲んでの座談会など、事前事後の活動にも力を入れることができた。 イ)11月の芸術鑑賞では「さよならドン・キホーテ」と題したオペラを全校で鑑賞した。セルバンテスの寓意に満ちた作品をタイトルに付すだけでなく、不条理・理不尽な世の中が劇中に上手に再現されていた。100名以上の保護者も会場に足を運んでいただくことができた。 ウ)来年度の開校記念式記念講演には、元日本代表のラグビー選手で現在は神戸親和大学教育学部教授平尾剛氏にお願いした。トップアスリートとして輝かしい実績を築きながら、スポーツの持つ本質と、本質が損なわれている現状を言葉で語るができる数少ない貴重な人物として講演を楽しみにしている。	A
		62	PTAや同窓会などの活動を通じ、在校生の応援団となるよう、ご縁を結び絆を深める。	ア)PTAの活動は、過負担に陥ることなく、かつ名前ばかりの過小な活動にもならないよう、程よい交流、保護者の視点から学校活動に取り込めるよう心掛ける。 イ)同窓会においては、会長以下役員が一期3年を満了し、昨年度末の役員会では、橋本会長が再任され、新役員が人選された。一期の成果を土台に、活動を活性化させていきたい。 ウ)同窓会においては、同窓会のリニューアル当初からの懸案事項であったサッカー部の全国優勝を讃える記念碑の設置と、総会の充実を柱に、運営に工夫を加えるようにする。	ア)10月に総会を開催した、一昨年度は「始めること」に、昨年度は「続けること」に意味があったが、今回は「内容を深めること」に重点をおいて準備を進め、抱えている問題点や今後の方針を掴むことができた。総会の前には、サッカー部の全国優勝を讃える記念碑の贈呈式も行うことができた。 イ)同窓会を活性化するためには、在校生に同窓会の活動を知ってもらい、かつ適切に支援することが大切との観点から、新たな試みとして「在校生支援プログラム」を実施した。全国大会に出場するチームを前に壮行会では激励金を贈呈し、卒業式では優秀生徒に奨励金を贈呈する予定。 ウ)無理のない範囲でのPTA活動を模索している。5月の総会ではBLENDのンケート機能を利用した意思表示を持って実施、6月の静学祭では役員の方々にクラス展示や模擬店などの採点員をお願いした。	A
		63	正しい情報を見極める力を養い、その情報に基づいた教養を育成する。	ア)中学1年生に対しては国語の教員と、高校1年生に対しては情報の教員と協力し、新入生向けの図書館ガイダンスを実施する。 イ)図書館利用授業を教員と協力して行い、図書検索の方法やオンラインデータベースの活用を指導する。(高校2年生の保健の環境問題レポート作成や高校1、2年生の総合的な探究の時間である緑風塾の手助け。) ウ)常に身の回りの情報に関心に向け、良き図書を提案する。月に1回、会議を行い、購入すべき図書を100〜150冊決定した上、発注する。	ア)中学部、国語科の協力のもと中学1年生に対して、また、情報科の協力のもと、高校1年生に対して図書館ガイダンスを実施した。静岡が中心になったドラマなどを題材に、興味をもった分野の書籍の検索方法を生徒に示し、練習させた。図書館にきた生徒の書籍の検索の手伝いができた。 イ)高校2年生の保健の環境問題レポート作成や高校1、2年生の総合的な探究の時間である緑風塾の手助けができた。生徒自身に自らの生き方について考えてもらうため、LHRの時間に文芸作品のDVDを図書館で鑑賞するなど図書館での国語の授業の補助ができた。 ウ)図書課員は毎月5冊以上の選書をし、月に1回選書委員会を行っている。教科主任や生活部長にも協力していただき、購入すべき図書があるか参考資料の中から吟味していただけている。図書のカウンターのやりとりから、生徒に人気の図書や購入してほしい図書の把握に努めた。	A
	図書課	64	知識を深め、自分の考えをまとめたり、発表する力を伸ばす。	ア)年に1回、図書委員による選書ツアーを行う。また、図書委員1人につき年に1枚以上のPOP(書籍のお勧めポイントを書いたもの)の作成を依頼し、それを展示する。さらに、POPコンクールへの参加を奨励する。 イ)文化祭において、校内ビブリオバトルを開催し、その上位者に、県高等学校ビブリオバトル大会に参加するよう指導し、引率する。 ウ)文化祭において、図書委員を中心に、発表するものを企画し、展示する手助けを行う。	ア)国語科の協力があり、POPコンクールに多数の応募ができた。中学の部では1位3位を獲得、高校の部では入賞者があり、始業式で表彰していただけた。POPの1位3位の作品はポスターに掲載され、私学読書感想文の優秀賞の氏名は作品集に載った。読書推進にも貢献できた。 イ)校内ビブリオバトルの指導をし、文化祭で発表できた。私学のビブリオバトル、県のビブリオバトルでは指導引率した。バトルで紹介された書籍を目立つ場所に配置し、お昼の放送でも紹介した。図書の企画で、自分にとっての「鬼」と「福」を考え書かせることで、表現の練習ができた。 ウ)図書委員には月に1度、図書館において委員としての活動を確認している。またカウンター業務を分担し、時には図書の整理も行っている。生徒が意見を言いやすい雰囲気を実践し、生徒発表の「図書のマスコットキャラクターの名前募集」や「ビブリオファイト」などを実施できた。	A
		65	創造力を備えた豊かな心を育むために必要となる、読書活動を推進し、そのための環境を整える。	ア)購入した図書を登録し、適切に、分類し、配置する。また、古い図書については、買い替え、または廃棄を行い、機能的かつ美しい環境を維持する。 イ)毎月1日の午前中に、新着本コーナーの入れ替えをし、生徒の興味関心を引きつける。また、教育棟と体育館の2階連絡通路沿いの展示スペースで新着本の紹介を行う。 ウ)図書館前のモニターや各種の掲示板を用いて、各種企画や、時事関連注目の図書などを紹介し、生徒の心の栄養となる読書をしよう、という気持ちを起こさせる。	ア)写真部や書道部の作品を展示し、生徒が図書館を訪れる機会を増やした。例年より早い12月に廃棄の手続きを始め、高3が家庭研修に入る前に廃棄本を案内し、希望者に配付した。クラウド型の図書館管理システムを使用している他校の様子や業者の話を聞き、情報収集ができた。 イ)興味のある新しい書籍をすぐに借りられるように、新着図書のコーナーは一日ですべてを入れ替える方式から、新着本を準備ができた順に並べていき、月初めに完成する方式に変更した。毎月1回、司書の編集で「図書館のお知らせ」を発行し、図書課の教員も文書作成や校正を行った。 ウ)教員だけでなく司書も出張し、校外の図書館の取り組みなどを学んでいる。図書館おみくじを作成し、「分類番号383.1の本を読むと良いでしょう」などの言葉で図書を借りよう誘導した。安心して図書館を利用してもらうため、昼休みは図書課員と図書委員の教員が分担して監督をした。	A
	国際交流課	66	ポスト・コロナを意識し、国際交流Programを活性化させ、生徒に様々な機会を提供する。	ア)交換留学事業を安定させるためホストファミリーバンクについてホームページを使い、お知らせする。 イ)国際交流課のSNS Accountを作り派遣事業の宣伝や説明等を積極的に情報発信することを検討する。 ウ)英語以外の言語を学ぶ機会を確保するため、SGT講座の開講を準備する。	ア)『トビタテ!留学JAPAN』に関する留学情報をBlendを活用し、生徒・保護者に対して積極的に情報発信することに務めた。特に次年度は『トビタテ!留学JAPAN新・日本代表プログラム(高校生等対象)ふじのくにグローバル人材育成事業』が始まるため生徒に対し今後も参加を呼びかけている。 イ)国際交流課のSNS Accountの設置・活用については、先進的な試みではあるが、教員が本来の書き込み業務の片手間に常時書き込みをCheckし、返信したり管理することは難しい。したがって今年度は開設していない。特に今年度は、課長から生徒・保護者へのBlendでの情報発信が精一杯であった。 ウ)Ukraine語のSGTを開講するため、講師についての検討を重ねたが、実現出来なかった。Ukraine戦争がUkraine側の敗北で終わる可能性が高まっているが、日本にやってくるUkraine難民が増加すれば静岡市内で講師を探すことも出来るかもしれない。現状では難しい。	B
		67	中・長期留学生の受け入れの検討。特にウクライナ避難民の受け入れについては慎重に検討する。	ア)次年度から再開を予定しているオーストラリア語学研修についてJWACSとの打合せを進める。 イ)留學生が来た際は、ALTによる中・長期留学生の日本語指導を行う。 ウ)中・長期留學生への月1回のインタビューを通して、諸問題を一緒に解決する。	ア)JWACSの日本語教育担当の教員2名が退職してしまったため、JWACSとの交換留学を今後見直しなくてはならなかったが、中学部と協力し、中3〜高2までの希望生徒30名のAustraliaのBrisbaneのCalvary Christian Collegeでの語学研修を実施することに至った。 イ)今年度は留学生の受け入れをしていない。但し、次年度は、公益財団法人AFS日本協会から『アジア高校生架け橋プロジェクト+』によるアジアからの留学生の受け入れとHost Familyとしての受け入れの依頼が届いているため課として十分審議の上、決定したい。 ウ)今年度は留学生の受け入れをしていないため実施していない。	B

			68	スケジュールの視覚化と業務に対する理解を深め、共有する。	ア)校内ネットワークを使用し、国際交流課の文書を共有し、各学年部で積極的に情報を発信する。 イ)トビタテ! 留学JAPANやNZ優秀生徒派遣Programについて、仕事を分担し理解を深める。 ウ)Hawaii語学研修Programを実現するための検討会を行い、実現に向けての審議を加速する。	ア)Blendを活用し、課長からの生徒・保護者への情報発信に努めたが、学年部単位での情報の活用については十分であったとは言いが切れない。特に高校生に対する留学情報の提供は、一方的な情報発信になってしまった。課長が中学の担任であり、高校のクラスや授業を担当していないことも影響した。 イ)New Zealand優秀生徒派遣ProgramやAustralia語学研修については、課内で引率者を依頼し、説明会やOrientationにも参加してもらうなど仕事を分担することが出来た。またE.W.Clarkと静岡学問所と題してSGT Global Communicationを開講し、生徒に対する海外留学への啓蒙に努めた。 ウ)Hawaii語学研修について業者からの提案もあり、まずは最初の話し合いが出来た。今後はAustralia語学研修との差別化を図り、より英会話を生かした研修になるよう本Projectを進めて行きたい。	B
事務局	総務課	69	財務状況の改善	ア)今年度予算に計上されている事業について重要度、優先度を再確認し、実施の是非を検討する。 可能なものについては事業規模の見直しや次年度以降への繰越を行い収支改善を図る。 イ)補助金や助成金の活用及び寄付募集を積極的に行い増収を図る。見積合せの実施を徹底し、支出削減を図る。 ウ)25,000千円の収支改善を目指す。 ※改善額の25,000千円は事業活動収支改善額と施設・設備関係支出削減額の合算とする。	ア)今年度予算に計上されている事業について重要度、優先度の再確認を行い収支改善を図りたかったが、予算計上時点で優先度の高い事業のみを計上していた為、事業規模の見直しや取り止め、次年度以降への繰越等の対象に出来るものは無かった。 イ)補助金の申請を積極的に行うとともに全国高校サッカー選手権大会出場事業の寄付募集を実施し、増収を図った。また、見積合わせの実施を徹底し、支出削減を図った。 ウ)収支改善の取組みの結果、本年度決算見通し(2月末現在)で事業活動収支が当初予算に対して約74,000千円の改善となった。	A	
		70	施設・設備新設・更新の計画的な実施	ア)今年度計画されている施設・設備工事を再確認し、確実に実施する。 イ)大規模な修繕工事となる校舎外壁保護塗装工事及び教育棟屋上全面防水工事の円滑な実施を図る。 ウ)谷田グラウンドコンクリート擁壁防護マット設置工事及び防球ネット張替工事の円滑な実施を図る。	ア)今年度計画されていた施設・設備工事の確認を行い速やかに着手した結果、すべて実施及び発注済みとなっている。(2月末現在) イ)校舎外壁保護塗装工事及び教育棟屋上全面防水工事について、7月より工事が開始され、大きな問題等も無く順調に進捗し、10月末に竣工引渡しとなった。 ウ)谷田グラウンドコンクリート擁壁防護マット設置工事及び防球ネット張替工事について、6月より工事が開始され、大きな問題等も無く順調に進捗し、9月末に竣工引渡しとなった。	A	
	学務課	71	学納金の確実な収納	ア)生徒・保護者には、年度始めに「授業料等納入計画表」を配付し、月初めには振替日および納入額等を一斉メールで配信。「授業料納付金収納状況」および「未納者一覧表」を毎月管理者に回覧し、収納状況を共有する。 イ)新高1生に対する就学支援金等の説明は、入学後のオリエンテーションで行うが、下記①②のために、3月中旬にHPに説明を掲載した。 ①申請手続きの準備を早めにしてもらうこと ②入学後の学納金の見通しを持ってもらうこと ウ)就学支援金・授業料減免と授業料の関係は、保護者にわかりやすく伝えるため、表やグラフを作成する。	ア) 延滞者には連絡をとり、「納入計画表」の作成や面談を行った。その際には、就学支援金や授業料減免の返金についても説明を行い、負担のない納入となるようアドバイスを行った。授業料減免の返金等により、年度末には完納の見通しである。 イ) 3月中旬に、HPに就学支援金等の説明を掲載したことで、入学後のオリエンテーション時には、具体的な確認を行う保護者が増えた。特に、何度も来校できない県外者には有効であった。 ウ) 就学支援金・授業料減免と授業料との関係を、表や説明資料でわかりやすく示すことに努めた。 家計急変や保護者情報の変更による就学支援金の変更については、私学振興課から指導をいただき、的確に対応した。	A	
		72	入学定員の確保(中学90名、高校360名)	ア)【中学入試の志願者(前期のみ)1.5倍以上(校長計画)】 今回の入試での、①サッカー部員数の抑制 ②静岡市内受験者増 ③女子増 の分析を行う。 イ)高校入試志願者単願180名、併願1,350名以上(校長計画) 今回の入試での、①県外生の抑制 ②出願目安点と併願特待制度の一部見直し の分析を行う。 ウ)受験を検討・決定する時期に個別相談会を実施。中学入試は夏休み以前、高校入試は12月を強化。イベント形式の相談会に加え、随時対応個別相談も実施。	ア) 中学入試は、志願者122名(男子76名、女子46名)、合格者・入学者99名(男子62名、女子37名)で定員確保。女子の人数は、現2年生27名、現1年生35名、来年度新入生が37名と増加している。増加の要因を検討し、来年度の広報につなげていく。 イ) 高校入試は、昨年並みの単願生を確保するも、併願者が芳しくない。特待生の付与を検討し、併願合格から単願への変更を促すなど、定員確保のための対策を尽くしている。「高校入試基準」の資料についても、特待や単願の表現を検討したい。 ウ) 小学生向けの個別相談会は6月から開催し、中学生向けには12月に3週連続で開催するなど、タイミングを見極めてイベントを実施した。イベント以外でも随時に個別相談を受け付けることで、相談人数は1.2倍に増加した。	B	
73		特待・奨学金制度の検討	ア)現行の特待生制度と、見直し案について、生徒・保護者のメリット・デメリットを一覧や表にまとめて比較・検討する。 イ)本校の特待生制度が志望校決定に及ぼす影響を調査する。	ア) 就学支援金制度・授業料減免制度の変更を確認しつつ、より明解な特待・奨学金制度となるように、現行の制度と見直し案の比較検討を行った。 見直し案への切り替えを検討中に、「東京都が2024年度から私立高校授業料を所得に関係なく無償化する」と発表があったこと、今年度の入試の傾向・入学者数の見通しを鑑みて、さらに検討を継続することとなった。 * 現行制度:就学支援金の区分により特待の金額が異なる。 * 見直し案:就学支援金の区分に関わらず、特待区分ごとの定額制。 イ)「令和5年度静岡県公立中学校進路希望調査報告書」の数字や高校入試出願者数から、通信制高校の影響を懸念する声も出てきている。私立高校にとって厳しい状況になることを意識して、情報収集に努めていく。	B		